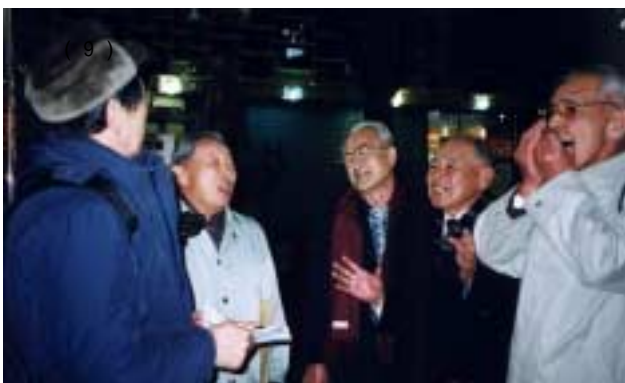


# 七十歳で同窓会に入会

## 24回生関東クラス会

24回生は激動の時代に学窓の時を過ごした。入学は昭和18年、既に太平洋戦争たけなわであった。入学したものの間もなく、陸軍幼年学校、海軍兵学校予科の募集があり、一部の人が受験してクラスを後にした。3年生の夏、空襲で校舎焼失、そして終戦。翌年暮、南海大地震、クラスメイトの一人を失う。軍学校へいった仲間は終戦後大部分復帰したが、宿舍の不足と食糧難のため転校していった者も



校歌を熱唱する声とハーモニカの音と、冬の夜空に吸い込まれる

いる。その代わり、京浜、阪神などで罹災転校してきたものもいる。入学時の定員は70人であったが、出入りを加えると延べ人員は80人を越えるのではないかと思う。

これに加えて、卒業はバラバラであった。昭和22年4年終了で旧制の上級校へ進学、昭和23年5年卒業で旧制へ進学、そして昭和24年新制高校第1回の卒業生として卒業と3回に分かれた。人数もほぼ三分の一づつである。

この出入りの激しさと、罹災による記録の焼失とがクラスメイトの掌握を困難なものとしている。同窓会への入会資格を「一度でも学窓に籍を置いたもの」とするならば、24回は80〜90人の同窓会員がいるはずであるのに、同窓会名簿には66人しかいなかった。この数字は途中転校や退学などを除いたものであろう。

そこへ一 年度の本部名簿から1名追加になって、67人になった。いわば「70歳で同窓会に入会」してきた人がいるわけである。彼の名は能津長和君。彼は



24

家庭の事情で卒業直前に親元の高校に転校したため、土佐高の卒業扱いを受けず、同窓会に入りそこなつたまま50年経ってしまった。彼の兄で22回生の能津恭久君が最近になって気が付き、「おんしはどうして同窓生でないのや」ということになり、同窓会本部に届けて二 年の名簿に初めて記載されたものである。我々24回生もどうして気が付かなかつたのだからと不思議に思う。在学時の混乱が尾を引いているのであろう。彼は「ノーシン」のあだ名でクラ

## 高知工科大で第1期学位授与式



末松学長、宮地副理事長（21回生）、岡村副学長（33回生）平成13年3月27日高知工科大の第1期学位授与式（卒業式）が行われました。高知工科大第1期卒業生内容：工学部卒業生449名（編入学による18名を含む）内土佐高校出身者12名（物質・環境システム工学科2名、知能機械システム工学科2名、電子・光システム工学科2名、情報システム工学科4名、社会システム工学科2名）

スの人気者であった。「ノーシン」は当時評判の頭痛薬である。早速関東地区在住のクラスメイトに招集を掛け、平成13年1月「24回生関東クラス会」を開催した。集まったのは在

住者12名中7名。新橋の赤提灯で氣勢をあげ、駅前広場で校歌を放唱した。添付したのはその時の集合写真と校歌斉唱の証拠写真、どちらの写真でも中央付近で「こやかに笑っているのが能津君である。」

# 高校1年生研修旅行 東京を中心にコース別研修

平成13年1月15日から1月21日までの1週間、土佐高校1年生の関東方面への研修旅行が行われました。この研修旅行は従来の修学旅行に代わるものとして今年初めて実施されました。その日程の途中19日に東京都内を中心としたコース別研修が行われました。これは、大学、研究機関企業等を数班に分かれて訪問するものです。我が関東支部の会員諸先輩の紹介によるものが中心になっていきます。研修旅行終了後の高校1年生の感想文の一部をご紹介します。(筆山編集部)

## 弁護士会館での研修と裁判傍聴

・初めて裁判傍聴をして、今まで自分の中で想像していた裁判の様子、弁護士と検察官裁判官のやりとりとの違いがよくわかって、すごく勉強になりました。マスコミで取り上げられているような事件の裁判の様子を聞いていると、被告人が一方的に悪人のように見えていたけれど、実際の場で事件の真相、被告人の心情を聞くと、すごく考えさせられるものがありました。同じ日本にもこの裁判で見たような被告人がいると思うと、裁判の様子以外にも勉強になったことが多かったように思います。(Oホーム N・K)

三才堂  
・辞書の出版という、著者から原稿をもらってきて、校正して製本業者に任せて売り出す……、失礼なことに、私はそんなふうに思っていた。しかし、それが私の勝手な偏見であることが分かった。何万もある語にいていねいに説明をつけていくことの根気強さ、そして何より「出版」するということが、ただ売り出すのではなく、文章の一文一文に責任をもつということ、つまり、「出版すること」イコー

(Oホーム M・K)  
・今まで本の保存が目的という図書館があるということを知らなかつたので、蔵書数を聞いてびっくりしました。また、書庫を実際に目撃してもらって、ふつうの図書館や書店にはない珍しい本があり、20歳になつたら、ぜひ来たいと思いました。(Oホーム Y・A)

決定委員会の会合を行って、どうすれば景気がよくなるかなどを話し合っているなどというところがわかり、勉強になりました。(Sホーム K・K)

東京学芸大学  
・今回の研修で自分が知りた範囲のことが大体わかったので、満足しています。臨床心理士になるための手順から他の心理学の分野などを詳しく聞いて、ますます「これを目指そう!」という気持ちが強くなりました。(Tホーム Y・S)



## 国会と国会図書館

・議事堂はテレビなどで見るのとはまた違い、実物は美術館のようで、全てを探索したい思いにかられた。議場ももちろんその他の細部にわたるまで、歴史を感じ、ここで日本が動かされているのかと思うと、不思議な感じがした。

## 日本銀行

・とてもすごい建物だったし、中に入ってみたらもっと驚いた。すごく高級感があった。日本銀行は50兆円ぐらいのお金をもち、月に2回金融政策



鹿島技術研究所  
・免震システム、無響室、太

陽電池など、現在の建築技術の水準の高さを知り、驚いた。それに都市環境の整備についても、とても熱心に研究しているのに対し、驚きを感じた。できれば、あのような研究所に就職したいと思う。(Nホーム E・O)



## 早稲田大学

・よく知られている大学で、設備もスケールもすごかった。学生も個性的な人がたくさんいた。楽しい雰囲気があった。興味が湧いてきた。図書館も便利で、大学のいい所をたくさん見つけられてよかった。(Oホーム S・K)



### 警視庁

・まず、漠然とすごいと思っ  
た。1日に5千件も一番  
通報があることも、通信指令  
センターの設備も、今そこで  
大きな事件かも知れない通報  
があることも全部驚いたし、  
「へえ」という言葉しか出  
なかった。3日に1回の夜の  
勤務はすごい大変な仕事だ  
と思っし、同時にすごい大事  
な仕事だと思っし。そういう  
風に働いてくれている人たち  
に感謝したいと思っし。

(Tホーム T・I)

### 高エネルギー加速器 研究機構

・講義を聴いて、実験や見学  
をするというまさに「勉強す  
る」という感じの場所だっし。  
「高周波加速空洞実験」は、  
まだ高校1年の僕には難し  
く分らないこともたくさん  
あつたが、研究所の皆さんが  
熱心に教えて下さつた。ピッ  
グバンなどのまだ説明されて  
いない謎など説明するために  
毎日仕事をしている研究所の  
皆さんはすごいと思っし。

(Tホーム M・K)

### 新日本製鉄 君津製鉄所

・間近で、鉄を連続熱間圧延  
しているところを見て、とて

もよかつた。自分の前を二  
度くらいもある鉄が通過  
したときは、とても熱かつた。  
24センチメートルの厚さのあ  
る鉄が2ミリメートルの厚さ  
で、mくらいもある鉄  
になつたときは驚いた。ダイ  
ナミックな作業だが、五  
種類もつくり分けられるとい  
う緻密さにも驚いた。

(Nホーム Y・K)



### 萬有製薬

#### つくば研究所

・新しい薬を作るのに10〜18  
年 お金が一五〜二億  
円かかるというのには驚かさ  
れた。また一つの薬を作るの  
には、気の遠くなるような作  
業があるということを知つて、  
薬のありがたみを再確認した。  
また、萬有製薬の「患者さん

のために」「独創性」という  
自分たちの私腹を肥やすため  
でなく、患者さんや、病気の  
せいで夢を実現できずに亡く  
なつた人達のために新しい薬  
を作つてつとする姿勢に感動し  
た。(Nホーム Y・T)



### 理化学研究所 筑波研究所

・研究室に入る際に白衣の着  
用が義務付けられていました。  
それはやはり、遺伝子の組換  
えという実験に伴う危険さを  
表わしていると思ひます。細

胞というものすごく小さいも  
のを相手にあれだけの研究を  
するのは、相当な知識と技術  
が必要だと改めて感じました。  
日本の最先端の研究を見るこ  
とができて本当に感動しまし  
た。(Hホーム N・I)



### 国境なき医師団

・今日、国境なき医師団の活  
動のビデオを見るまで、私は  
医療の発達していない地域で  
どついつ工夫をして、どんな  
器具を使つて病気を治すのだ  
ろつとということしか考えてい  
ませんでした。でも、ビデオ  
の中の看護婦さんが「いろん

なものをつつていく患者さん  
に私たちは愛をあげるんです」  
と言つたのを聞いて、患者さ  
んに必要なものは医療器具だ  
けじゃなく、もっと大切なも  
のがあるということを学びま  
した。(Nホーム A・K)

### 東京大学

・赤門というのを初めて見た。  
ものすごい感動した。成績が  
悪いのはわかつてはいるけど、  
絶対につかつてやると思つた。  
博物館はすごい不気味な雰囲気  
で、どれも今にも動きだし  
そつで、こわかつた。そして、  
なんといつても食堂、おいし  
かつたし、土佐に比べて、大  
きいし、あつたかいし、便利  
だつた。しかし、東大理1に  
うがるには勉強しなければな  
らない。勉強しよう。

(Hホーム E・Y)





ギニア共和国の山村で活動打ち合わせ中の筆者

筆者は10年前の平成3年に、それまで東南アジアで熱帯農業、林業に携わっていた企業を離れ、西アフリカで農村開発活動を行うNGO（非政府組織）を設立、そこに住む人達の「貧困の解消」活動に関わるようになったが、その動機は少年時代を過ごした高知の自然に起因しているように思えてならない。

現在の土佐清水市、当時は清水町立尋常小学校を昭和19年に卒業したが、在校中の思い出といえは、太平洋戦争のため食糧不足でひもじい状態が続き、勉強より食べる事が最大の関心事であったことである。昼食の弁当は、母が蒸したサツマイモが2個、午前10時頃には腹の中に収まっていた。夕食まで空腹のままでは過ごせないのが放課後、友人達と海岸で「穴タコ」採りに精をだした。小さなバケツに木灰を入れ、この灰を波打ち際の岩の穴につまんで投入すると、潜んでいた小さなタコが顔ならぬ頭を出し、面白いように掴み採りができた。これらを焚き火で軽く焼き空腹を満たしていた。自然の豊かな高知での食糧不足は、戦争のため食料が戦地に送られていたためと子供心に感じて取っていた。

現在、縁あって日本人に馴染みの薄い西アフリカの農村に住む人達の「貧困の解消」活動を行って今年で



乾季は植林地に毎週2回村民総出で谷川から水を汲み苗木1本1本に灌水する



日本の伝統有機肥料「ボカシ肥」の生産指導

10年が経過した。活動地であるサハラ砂漠の南に位置する。大きな雨季の期間が5〜6ヶ月と短く、その収穫量は降雨量に左右され減少傾向にある。降雨量の減少は、欧米向けの輸出を含めた木材の需要増により、森林の伐採、消失に起因するところが極めて大きい。僅か5〜6ヶ月間の雨季の農作業による食糧確保は、1年間生活するのに必要な絶対条件となっている。雨季に対する乾季は、農地が荒漠たる茶色の世界と化し、半年間食糧確保は不可能だからである。1日1食、2食を余儀なく

されているこれらの地域に住む人達は、言わば人間生存の極限地帯に住んでいると言っても過言ではない。毎年この地を訪れる度に思うことは、過去に空腹生活を唯一体験した戦中、戦後の食糧難の高知での生活との比較である。程度の差こそあれ食糧不足は、当時の高知と現在の西アフリカに各々住む人達にとっても、生活上の最大の不安要因である。しかも双方に共通していることは、共に同じ人間がこのような原因となる環境を自ら創り出したことである。西アフリカは森林の伐採、消失であり、日本は自ら仕掛けた戦争である。他方、世界人口は増え続け、二三年には一億人に



森林再生植林のための苗圃。カシュナツの苗木

今こんなことになっています